

硯蓋

飯臺○圓蓋ヲフセタル所也、食スル時、下ノ如ク仰ケテ、其上ニ碗ヲ置キ、食テ後拭テ臺ニ碗ヲ納ム、下ノ如ク引出シアルモアリ、春慶ヌリ、或ハ黒カキ合セヌリ也。
京坂市民平日専用之江戸ニテハ是ヲ折助膳ト異名ス、其故ハ用之者、毎食後ニ膳椀ノ類ヲ洗ハズ、唯月ニ四五回洗之、其間ハ布巾ニテ拭之納ム、此故禪僧及ビ武家ノ奴僕用之也、奴僕俗ニ折助ト異名スルガ故也、

〔骨董集上編中〕重箱硯蓋

今之硯蓋といふものは、いと近年比造出したるものにや、古き繪に見えず、七年の印本の繪に、重箱ありて硯蓋なし、卵子酒寶永六年作の繪に、硯蓋ありて重箱も交りてあり、自笑の草紙寶永七年板の繪には、硯蓋のみありて重箱なし、これより後西川祐信がかける印本の繪などを、あまた見るに、硯蓋のみありて重箱はなし、これ等をもておもふに、重箱に肴を盛ることは、元祿の末にすたれて、硯蓋に盛ことは、寶永年中に始りしとおもはる、但硯箱の蓋に菓などを載たる事は、古き記録或は歌集などに見えたり、山の井慶安元年印本卷之五に、新黒谷の花見の事をいへる條に、あやなる硯箱やうの物のふたにくだものいれ、青きひとりにたきもの、えならぬ、くゆらせたり云々といへるも、ふるき物語ぶみの體をうつせるものとおぼゆ、近世好事の者、古へ菓を盛たるにもとづきて、硯箱の蓋に肴を盛しが始となりて、つひに一種の器物になりしなるべし、されば硯蓋は式正に用ゆる器にあらず、○中

三足猿考撰上梓の年號なし、
按るに寶永の比號なるべし、著作堂藏本、

附合の匂菊の香に菓子とりませて硯蓋

蘭小

硯蓋に菓子を盛たる事、近は此に見えたり、本朝諸士百家記寶永五年印本卷之五云々など、とりつくろひての饗應、硯蓋に干菓子うづだかくもりて、結のしふさやかにけはふたるは云々、こゝにも